

2022年度 ドコモ市民活動団体助成事業 活動成果報告書

2023/9/29

団体名	NPO法人 日本こども支援協会	活動タイトル	日本唯一の里親互助ネットワーク支援体制の強化	
<p align="center">望ましい社会状況および団体のビジョン（社会的役割と活動基盤）</p>			<p align="center">■ 活動風景</p>	
<p>●地域の望ましい社会状況(ビジョン)</p>	<p>当会のビジョンは、「暴力や貧困ではなく、愛のバトンを次世代に。」である。虐待、貧困等を背景に、社会的養護下で暮らす子ども達が約42,000人。そういった子ども達にとって、愛情と適切な養育環境は必要不可欠で、日常を通じて愛着形成を行うことで子どもの人生を取り戻す、里親の存在に注目が高まっている。一方で、里親に託される子どもの養育は大変で、里親には様々な困難が存在する。私達は、里親を支えることで、少しでも多くの子どもに愛が循環する社会の実現を目指している。</p>		<p>○委託前の里子家庭の状況 父（仕事が続かない） 母（精神疾患あり。治療継続中） 長女（里子本人 身体的虐待有り） 弟妹 3才、2才、1才双子 毎日夫婦喧嘩が絶えず、その後両親は離婚。 親権は母親になったが、離婚直後から生活に困り、長女は里親家庭に、弟妹は施設に行くことになる。 母親には子ども達を育てる意思はあり、将来的に全員を連れ戻して、母子6人で生活するつもりだと兄に話しており、里子自身もいずれ帰ると言っている。 実親との生活中は、長女が弟妹達の世話をしていた。</p>	
<p>●団体の社会的役割(ミッション)</p>	<p>当団体の社会的役割（ミッション）は、「すべての里親がつながり・支え合う互助ネットワークをつくる。」ことである。具体的には以下の取組を推進する。ONE LOVE オンライン里親会を養育里親等2,000人以上に知ってもらい、里親にとって必要な支援の在り方を形にする。寄付者等を募って里親が無料で利用できる運営体制を築く里親の情報や困り事等を可視化し、里親制度の改善や是正を実現する。里親には支援が必要である事を啓発する。</p>		<p>里親と専門相談員の記録日報の一部抜粋</p>	
<p>●団体の活動基盤</p>	<ul style="list-style-type: none"> ●望ましい人的資源：運営に関わりたい意思と事業拡大に必要なスキルを有する、多様なステークホルダーが増え、里親互助ネットワークが持続的に運営される体制が構築される ●望ましい活動資金：運営に必要な固定支出よりもマンスリーサポーター等の寄付収入等が上回る。遺贈での大口寄付や企業と寄付つき商品等の協業が実現し、収入源の多様化、安定化が図れる ●望ましい情報：運営に協力したいと考える個人、経営者、遺贈寄付推進に協力したいと考える士業等の情報 		<p>御夫婦での相談でした。とにかく両方からお話を聞きました。 ・問題行動の原因の1つとして、ためし行動の可能性が考えられる。 ・テレビをいつまでも見たがる問題は、育った環境から、テレビがついている事が心の安心に繋がっているのかもしれない。まだ委託されて5ヶ月程度なので、これから時間が経って里親家庭が自分にとって安心できる場所であると本人が納得して、他に興味が出てきたら愛わってくれるかもしれないとお伝えしたら納得してもらいました。 ・オットセイ理論とヘジット効果の話は目から鱗だったようで、すぐ試しますと言ってもらえました。 ・レスパイトについては、兄にそれをお願いすると里親不適合と思われるので、委託解除になると以前噂で聞いたようです。そんな事はないと思うとお伝えしましたが、レスパイトについては兄によってかなり差があると感じました。 ・とにかく話ができてスッキリしたと言ってもらえました。また参加しますとのことでした。</p>	
<p align="center">■ 活動報告</p>			<p align="center">■ 1年間の目標に対する達成状況(まとめ)</p>	
<p>・個別相談会の実施 自身も里親経験があることで里親の悩みを深く理解できる専門員と里親がグループ形式で様々なテーマに基づいて、悩みや相談を収集する機会を設けて、内容を記録した。 ・有識者と支援の在り方の検証 専門里親制度構築への関わり経験のある相澤仁氏、里親支援専門学者として第一人者である伊藤嘉余氏を交えて、里親の悩みや必要な支援を検証し、影響力や実現可能性を加味して、支援の優先順位を定める機会を実施することができた。 ・アンケートの実施&支援内容のブラッシュアップ 里親に対して一斉にアンケートを実施する体制を整備し、実施したアンケート結果をキントーンに蓄積し、分析等に活用できる体制の構築ができた。 ・データベースの整備 上記アンケートに加えて、里親の個人情報や里親オンラインセミナーの参加履歴等、1里親に対する様々な履歴をキントーンに集約し、今後で活用できる体制がと整った。</p>			<p>・個別相談会の実施 ①開催数：49回 ②日報の件数41件 ・有識者と支援の在り方の検証 ①開催数：4回開催 ②目標アウトカム：形式は変更になったが、伊藤先生が設定した項目でのアンケートを実施し支援の方向性を定めることができた ・アンケートの実施&支援内容のブラッシュアップ ①実施数：1回 ②目標アウトカム：アンケートの回答者数60名、対面交流会の実施1回 有識者参加者数2名、里親参加者数15名、里子参加者数9名 ・データベースの整備 ①登録里親数：823名（23年9月末現在） ②収集できる種類：里親へのアンケート内容、セミナー参加履歴、里親に関する様々な個人情報、里親保険の加入希望有無等、里親とのやりとり履歴（メール履歴等）</p>	
<p align="center">■ 事業を通じて得られたノウハウ</p>			<p align="center">■ 望ましい社会状況を達成するための課題</p>	
<p>従来の里親に対する相談会は、対面で行う形式がほとんどであったが、ズームを活用してオンラインで実施することで、対面では里子を養育しているために相談会に参加できなかった全国の里親から、様々な悩みを集約する状況が実現できたことが最も大きな成果であった。更に、上記で収集した悩みを業界の第一人者と意見交換を行い、里親への影響力と実現可能性を加味して、自団体のリソースを配慮に入れた上で、絵空事ではなく、具体的かつ現実的にできる支援の在り方を検証できたことで、今後の活動の方針が定まった。一方で、中長期的な支援だけでなく、コロナ禍を機に交流を絶たれていた里親と対面での交流を実現することも叶い、里親同士がつながること自体の意義や必要性を理解することができたことも、大きな気付きであった。今回の助成を機に強化できたデータベース機能も活用し、弊協会ではできない支援を形にしていきたい。</p>			<p>今回の助成で実施したことを踏まえて、現時点で整備している里親支援を地道に継続していただくだけでも、様々な里親に必要な支援が届けられる状況にあることが理解できたが、一方で、現時点で支援を届けられる里親の絶対数がまだ800名強に留まっている状況が大きな課題であることが、明らかになった。日本全国で委託を受けている全里親の約半数が、里親会等にも属せず、孤軍奮闘して養育を行っている状況を踏まえて、里親同士で支えあい、専門家のサポートを受けられる支援ができたこと自体を知ってもらう事が大きくそびえ立っている。里親への認知を広めることは一朝一夕では実現できるものではないので、今後も重点的に予算や人員を配分し、里親支援の規模や充実度を高めていきたいと考えている。</p>	
<p align="center">■ 活動成果のアピールポイント（自由記入）</p>			<p>この1年間の活動を通じて 実現可能性と影響力を加味し、里親に必要な支援の在り方を定める方針の策定 を達成しました。</p>	
<p align="center">■ 受益者の具体的な変化（自由記入）</p>			<p>対里親1個人：里親に対する情報を体系的に収集する体制が整い、里親の悩みや活動が可視化されるようになった。対里親全体：全国各地の里親の支援格差や制度の違いが明るみになり、一定量の里親から収集した客観的情報を収集できるようになった事で、政策提言を行う道筋が見えた。</p>	